

平成 24 年 10 月 4 日

滝久雄基金海外体験学習助成【2012・夏】終了報告書

国際開発工学専攻 修士課程 2 年

国際開発サークル IDAcademy の活動として私がベトナムで行っているプロジェクトにおいて、この度、助成を頂いてフィールドトリップを行いました。以下にその結果を報告致します。

1. フィールドトリップの概要

【期間】 2012 年 9 月 1 日から 2012 年 9 月 29 日まで

【場所】 ベトナム(滞在順に、ナムディン省ダオケイトン村、フエ省、ハノイ市)

【目的】 1. ノンラー作りのための機械装置のプロトタイプ試用

2. 著名なノンラーの生産地であるフエ省やチュオン村から収益向上のための取り組みのヒントを得る

3. 現地パートナーとの関係構築

2. ナムディン省ダオケイトン村における活動のまとめ

当初、ノンラーの縫い作業を機械化することを目指しており、今回のフィールドトリップではプロトタイプを試用を行うことを予定していましたが、縫い作業を機械装置で行うことの技術的な突破口を見つけられないまま渡航を迎えたので、現地では生産工程の縫い作業以外の部分を効率化の対象にすることも視野に入れ、全生産工程をより詳細に観察しました。結果、生産工程初期の、ヤシの葉を開いて伸ばす作業も多く時間が割かれていることが分かりました。また、生産者や流通業者へのインタビューから、ノンラー生産家庭の多くは農家で生活に余裕のない家庭であること、子どももノンラー作りを長時間手伝っていること、過去に刺繍などを施していた時期があったこと、流通網はベトナム国内のみならず中国にまで及んでいることなどが分かりました。

3. フエ省における活動のまとめ

フエ省は刺繍等の装飾が施されたノンラーの生産で著名であるので、ダオケイトン村での観光用ノンラーの生産の可能性を睨み、ノンラー生産や生産家庭、流通状況を調査しました。調査

の結果、フエのノンラーは販売価格が高いわけではないこと、生産者の利益分もダオケイトン村の生産者と大差がないこと、生産者家庭の数は特にフエ市内の産地で減少しつつあることなどが分かりました。興味深いことに、フエの自治体はノンラー作りの伝統を守っていくことを目的として、ノンラーのフエのブランディングや新デザインの考案といった取り組みを行っていることも分かりました。



ノンラー生産工程の調査



フエ伝統のノンバイトーの生産

4. ハノイにおける活動のまとめ

主に、ノンラーの生産地として有名なチュオン村の訪問、ハノイの土産物市場におけるノンラーの位置づけの確認、そして今後、プロジェクトの方向性を確定し、活動を本格化していくうえで、欠かせなくなってくる現地でのパートナーとの関係づくりを行いました。

まず、チュオン村の訪問では、ノンラーの生産状況や流通について確認した後、ノンラーのマーケットの側面について理解を深めるために、ノンラーの輸出を多く手掛ける女性に話を聞きに行きました。ベトナム国内市場においては、ヘルメット着用の義務化などを背景にノンラーの需要が下降傾向にあることが分かりました。土産物市場の調査では、ノンラーを専門的に扱っている店はなく、その他各種の土産物と一緒に扱っている土産物屋を数軒見つけました。置かれているものは、チュオン産やフエ産のもので、チュオン産のものは実用目的、フエ産のものは観光目的であるのに対し、販売価格は前者の方が総じて高いことが分かりました。全体の印象としては、現状、土産物としてのノンラーはあまり人気が高くないと感じました。考えられる理由としては、持ち帰るのにかさばる、デザイン性が高くない、というのがあります。最後に、現地パートナーとの関係づくりですが、友人の紹介などを頼りにハノイの大学生と会って、プロジェクトの主旨、活動方針などを説明し、協力を求めました。結果、ナムディン省出身で現在ハノイにある大学に通う大学生を中心に、6名から協力に対して積極的な返答をもらいました。今後、協力体制などの詳細を詰めていく予定です。

5. 今後の活動について

まず、本年度3月末を区切りに、引き続きノンラー作りの生産性向上手法の研究と実用化を目指して行きたいと思っています。現地パートナーとコンタクトを取りながら、日本をベースに研究を進めていき、来年のフィールドトリップで実用化に向けた調整を行う予定です。理想的には、来年度以降もプロジェクトを発展させ、流通・消費サイドの調査を進めて、先細る需要に対するアプローチも図って行きたいと考えています。

6. おわりに

今回のフィールドトリップでは、現場が海外にあり事前情報が限られている中で、的確な計画を立てて行動することの難しさを再認識出来ました。当初の目標で達成できなかったものもありますが、自身の成長という意味ではとても意義深い体験を得られました。

滝久雄会長をはじめ、寛大にこのような機会を与え、実現に協力して下さった関係者の方々に、改めてここに謝意を表します。